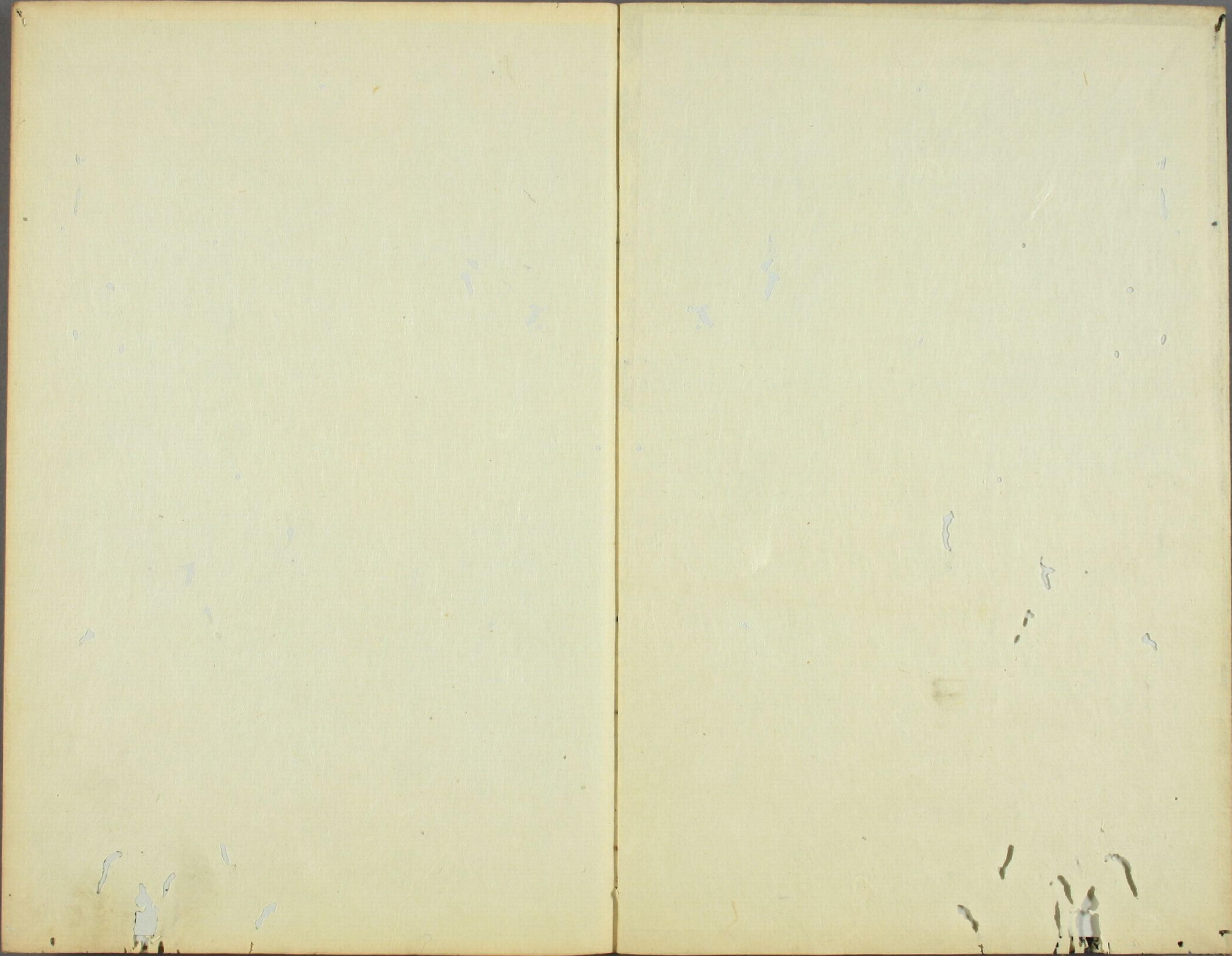




8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9



詞瓊綸三之卷

七

○その詰びハ、紐後の右。り此時^{このとき}の辞を、一の毫に生せら三教^{三教}論^論を
めし、停^止三教^{のうち}ぞや何^を此詰^びを紐後中^のりたりたり定
あり此^{とく}にて、三教^は大^きみどりに詰^びざれを、モモ詰^のの詰^び
を、三教^{の中}のりたりの辞を除^そきを、悔^{なま}を必^しモ右。り此^を詰^びナ
モどもゆる辞のくち^くべて、ふとはうてモ何^をを廣くある^る、
能^{する}い主^をさせ^まく^く右。りに定^むとはうれ三教^の辞を、
モ詰^びと紀^ぞのや何^をに對^て、か多く^い代^えもとま^すのあが
ゆゑある。

和歌文庫

○動のぬ言ひて詠ふを

十九
春柳をやく春ふうりを草むれめふて草をうめむ花屋
あたぬとえまうらのうもくもく物をうぐひすの春
おのづく春むるのを庵のおせふ木葉吹く谷風ゆく月
さびくともみ山の秋乃秋ぐすり音にちをき桂化下落
よがをもく落葉下もく一茎うちばうとしぞう秋
日モ時あくぬ山をや下れりそとくかのこまくにまのぬる
○ソシウキを詠ふを

後拾

十九
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも

モ

やまかの里

十九

秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも

モ

やまかの里

十九

秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも

十九

秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも

又一つの格ある

十九

秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも
秋風をもく秋風をもくかくあぐくもくをも

又の字にて君もつをあく秋風をもくかくあぐくもくをも

モ

ちりもくとあく虫を

モ

右のたれへつは枝を
又つ生とつきとをお育へてソノモ

み山すも 桧の木どふきえあくふるよこ そのべ乃ヨリおつりそ

人そひともとくはまくさみくそを 花をむくじくまくしむら
さるそくへはまそく そくぬ郭もとがうらひでのひづをうる
いうせん食も からくまくめをあひ そすをばくへそほをそし
右の白やまのあと、春ハ一のあと、二つのわきでまくら花へ、下
のものあは上のもの花と咲ひ、下のもの花も、ソクせんのあは、上のもの花と
咲ひ、下の二つのも花前か阿をくら一株のわき、
又を二つぞ二つあるあ

ち 年ぬをむおひそむひ ひぬそも あせど花をアシバ物是ひとあ

○一つのそ

ち 箕のに家を正されぬ物あはは山のうすにと あひをと

アシ

後 あがのくひ天の川原をせうり後のみをうをうそそふそ

そ せよ

新易ハ かりにばまある山の寝がさくふとあもうくをとまくそく そ せん
蓋カ 下たまふくちをさへえ渡る物くちをとまくそく そ

ソグセキの匂れまでふとまくそくをとまくそく あ

千葉集ナセテ阿モ

○ふそのかのそくむのまへかくらの歌日は重とをするは消滅する有りどとニヤリヤリある
歌ハの歌をハルト声くあくとひきせ下の消滅する有りどとひきせ下の消滅する有りどとひきせ

候詫 五月そも みがのまき記のよこそ茅かく田を御石等何ぞととあ

四 ゆきそも そく一小篠の原もあ一のそく此のらのうちの

まくそく月をふそくのとひをは後子夕をがまにまくが

○ちむ

左 唐日櫛江吉のゆもて生牛くち茅れを川ふ足レ君そも

そも

口十七

さのまうめつまきのうせをまくをくどちゆくあさり

とく

口十八 わ今とは國内をくに時と節と物との経きへをはらう

とく

口十九 やき陣へ正月ゆき一バ千もがある而倍の市はる町へ

は辞儀業小はあれ考にわく阿豆ちゆに花橋姫のあふと

とく

口二十 やき陣へ正月ゆき一バ千もがある而倍の市はる町へ

とく

は辞儀業小はあれ考にわく阿豆ちゆに花橋姫のあふと

とく

口二十一 涼く涼く

とく

○もや

口のぞ歎息はやの教りせせを

を

○潤

口のぞ下暖ひぬるをとふと未だるかゆてソアモニツ何り、暖ひ

ぬるをとふと花を花ちせを自生を自生をあとせばと
未だるをとふと花を花ちせを自生を自生をあとせばと
めとて暖ひぬるをハジセドヒトシとおとせばと花を花
月それと
計りがどく 未だるをとふと花を花ちせを自生を自生をと
上を暖ひぬるをとせばと花を花ちせをと

とく

○をを

えをハをせををせををとてをはをやす等とくとく

のめく船をもひをのものをとある

をを二つお對へとある

古ハ

秋萩の花をを

面うめせども君をを

まくをとくとちを

○あうを

はあをいきゆるよみのあへ、まもあうとつきむハ、

てその旅びの

あうと一つこ又あうをハあうととお對ふ辭へ

古マ

あうとを多か見

しを近うり見ぬか

まくけりかうり

口ハ

赤を君あふを致うく夕何

しを

う紅色をみつの方とあわ

後九

秋の因れりてとまとばづけ

しを

思ひふるかうりきする

古マ

あの多と一人をあうち山のまきよえ

しを

匂をりにま

あうとあうとあふ
うふこゑをそりハの
をつ引の部

○なを

あくとてうばといふ者

古ハ

オに底の阿み

あくと

あがきと人かあくんやうぞき

古ハ

ほねのあくばうぐひとすりびん人のうろれとちり

あく

山ちういきづくさくくぬをれあくやあくん年つぞり

古ハ

かづる山ありとハきけど喜がくみ立正を

あく

かづり一かく

古ハ

かづる山ありとハきけど喜がくみ立正を

あく

かづり一かく

古ハ

あめべしてらうひあく

あく

東経日のあくや人をじと魚も

あく二つ阿くハ

後六

志今をぬり跡を

あく

人ふるせり河へおちり

あく

情をぬる無義

おでへてあらを ○ てを さきへたらとひよきあらをとお籠ふ辞之 おべてふとて
のつまくとも間 あら たまらるるもの約束して主と六の主の所ほの形う
をたる次もばかり上へうる格あるもこれへ下に主とおくめておあたらしむすして下にせたるまくじと
お格と申るそと お五十五秋を経うかとまつが春ぬぬきぬれが即取の風しとま てを
せあらを

古 うゑが音を紡うつてとめ てを 麻ハあぐをがくまなま
口七 こがよひひ馬が八多代うとうきてとめおき てを 思ひやふせと
口八 わうせ てを わどとへど川と思へばや川とふづにうみて思へれ
口九 ミちのく爾育とひある名取川あきどう てを くま一ツアリ全
口十 ひが底をまゆびう称 てを あくの山とちがあれをタマぬを
口十一 あひえ てを あぐまをやと我思ひしたあごくへせと底うりれ
新丸 大きにても毛色をとめ てを 天の下みはあきう度をべき

紫式ア 日記 たまねうとばかりたまくひあゆ魚阿多 てを いふふくや一かくふ
右のてを、ソシモをやりて渦を辭あるがほてよもよひがなと
あり、藻葉にもみる渦る字をうき、左今十あがきても妹
さとのせば萬の活用みてせ志布あられとほくこのてにをもせうるあは未然事をひふ核の
ことなどを ○ せを せをといへをあらくへ下にあーとしよ例え
せきのアヌのひら不うきはまちとキタヌ(スカ)を下のアナセのひらと考ラ(スカ)をにのアナのひら
あらせをひらせの反れへあられ て 一 在中にあえてほくはなり せを まのくろもとのどきやくま
であけれをと見る時もやあらせをひらせ 月 又 かみぢ葉があがき せを まの川かね秋をたまうも
かみぢ葉があがき せを あきうたまくひがなと あを
月 六 桂の香のあらおりも空ふまぎ せを あきうたまくひがなと あを
月 七 りううはあきよなう せを いつをひう人のとおをうきつまうも
月 八 おれ清うみのあひせを 番袖のあどこの川下うゑす あを
六 おととよ也

紫式ア 日記 たまねうとばかりたまくひあゆ魚阿多 てを いふふくや一かくふ
背北山のうみのあくひのてをとハ異ある
ことなどを ○ せを せをといへをあらくへ下にあーとしよ例え
せきのアヌのひら不うきはまちとキタヌ(スカ)を下のアナセのひらと考ラ(スカ)をにのアナのひら
あらせをひらせの反れへあられ て 一 在中にあえてほくはなり せを まのくろもとのどきやくま
であけれをと見る時もやあらせをひらせ 月 又 かみぢ葉があがき せを まの川かね秋をたまうも
かみぢ葉があがき せを あきうたまくひがなと あを
月 六 桂の香のあらおりも空ふまぎ せを あきうたまくひがなと あを
月 七 りううはあきよなう せを いつをひう人のとおをうきつまうも
月 八 おれ清うみのあひせを 番袖のあどこの川下うゑす あを
六 おととよ也

口ナニ

ありひつめをぞや人のえみつん多とまう **セモ** さあざくを

又 **セモ** とありしもハ上へへりまーといへり

古ナエ

立すを立たぬとまーと あくとひいとかくと見物とま **セモ**

後松

よのや筑るふあきつ **セモ** 山傍くらむるわざのうろなる **セモ**

又 **モー** といざらとあれ小ハ有 **セモ** まきひり

古

まふづアおひうき飛べテヤド **セモ** 何やあくあみの名を立ちあん。

後九

ヨリ川海不原支うちのあく **セモ** あふかハ君を恨む一もせん。

セモハシトホホホとレル詞あるもホセモのにハおきかーあよケモハセモとシ付ハ過去の事キモフ詞にあるセモとシセモのたゞ。○上ホホモ所てホセモとセヒテ御五の巻ヒタルの新弓セモハリ。二千のけちのの、セモハリ。

○まー四モ ちきハ下に又又モーとシト例へ

古

まよ深く宿だ見だう **セモ** 郭云人情で尔てをまくべ

セモハシトホホホとレル詞あるもホセモのにハおきかーあよケモハセモとシ付ハ過去の事キモフ詞あるセモとシセモのたゞ。○上ホホモ所てホセモとセヒテ御五の巻ヒタルの新弓セモハリ。二千のけちのの、セモハリ。

後二

山里了ちりふ **キテモ** まくともカラムキムリもあくも

口ナニ

阿く候ミ方なモ **キテモ** も翁の翁もあくもあきせキヤ

拾十九

おやのたゞとあります **キテモ** とひてキ一亦ふれ子ハ阿くねあるべ

歌ナエ

かのいのちをとふ **キテモ** ツバサアもあく體あがゑキヤとやん

又 **モー** とありしもハ上へへりてモーといへり

後十六

只ひゆくとすが奈をたきどモー 始のちくをとあります **キテモ**

射十三

きれゆくとすが奈をたきどモー そせ乃あくうさふとあります **キテモ**

口十九

あれくとすが奈をとあります **キテモ** あく人ナリとあります **キテモ**

又 **モー** とありしも上へハカヘシ下にとまくのくのく者

シテテトヨム日日とたかざとの通販比数とあります
之を通販のうれと魚へうへかぞうれーうへーとあきあきとそりうめ
ウヘキーナキをばらにふくめてりひのこせぬお次のおすも時日ト換え
後拾
花子を身にうだる事わざくと事、ハラギリ社あう
口ハ
タヤシヅル今般もううじふまうく尔せきえて人を玉られ
口ナ
自氣乃いもとしもとくもとれお山のうあ
口ナ
ほりつまえりけんりとをきのあせこをと入おとおすを
新十三
たのえぬふれくやとまうひのまえらけやうてとく阿斐ふ
口
左の格後拾生集にはふおやー後もつぎくおやがる
後拾
山のうれりから
まくも
にあうりをなじむかぐきぞうきを

の中にあ
きりをとおりよ人あたがたぐくせ成すをもく哉
を例のぬくゑてととえくるをも

右のうどれはざく下にまく成ふく後てりひまつ例左、代ふを
あきど、**まくは**ハ群う多く有て一格のめ、**まく**をの如く
をもせて、是おの下ふ
をほりて上へうへて下にを
をかくめてソレをもく格
東北を恵み月の山田も唐ふ
あくびのひのひのああら
くも人唐
あきど、**まくは**ハ群う多く有て一格のめ、**まく**をの如く
を後拾にて多ふ
多くの通販比数のうびつもくる日毎の七日あうせ日十九有てやも
おとせざまべきは此のうびつもくのうりとがーも千載十三度ごくとくら
久の席うえをぢまちうりーゆれうつあうせもこまく、せりひあて
てことをめくめとお業みせのをかうて小はまく不せえいたを考ふく不
殊がたとまくれぬーそを日十人まくあ能の卒比志くを妹と
したがとうれむ日十と秋義アホするお業みせぬとむ君が日本乃
はあーとくとがちまくとく

でちで まかせとくわへ一にと
くのうひきとくわへ二のをつまみとく
の部とくわへ

まかせとくわへ一にとく
のうひきとくわへ二のをつまみとく
の部とくわへ

ニミヌクア
ナセモハラエ
のヌラトナリ
又ラセヌ
ヘアヌトヌ
トヘ此れを
ラ小西モセ
テラモトモ
けハヌエヤ
ヌヌモセモハ
ヌミヌヌモ
モセヌヌヘ
ヘモトシム
セヌヌモセモハ
ヌヌヌヌヌ
ヌヌヌヌヌ
ヌヌヌヌヌ

後土
十九
日
拾八
万二
新八
後拾
十一

多詠亦に嘉かれむと云ふ
さばく別を一時り
轟き川あざみにせ
向を人りのいのちを
枚ある門あるまを
たすと云ふ

ませを 称ざれどあはれ、がくす
まぜを あはれ、おがくまくそ
まぜを 流きみのどけ下向かよ
まぜを あはれのせん千
まぜを ふのありをいひあはせ

せかうを、
かのえを、
のえを、
とくを、

万
ナエ カクをうりこむ
きあ拾き集
てみはあわせをば
○ぬるのこの祐を

んとあきらめます
主せを 姉をも兄弟をゆるべうりふ
主せを おじをあきらめます
主せを おじをあきらめます
はあの外へある方に主せをといふ

新一
万十
キ

此詩第幾にあるか考へ、七の左を古風の部アカナサセリトニテナガの動り
は詩三句を取つ、皆このをやの部アカナサセリトニテナガの動り

○此の旅びをと全く口
○勤うぬまうて旅ぶ也

十七
秋
花あつてたゞ紫は

アラムニテルアラムニテル

七

21

1

二

8

山

後撰
後撰

四石うるあるをあけてえほきは處のへ

おも川山沿

並浦な
集

けむなまくらわむれあひきば山べり一朝のせぬ

比

さもあ

金八
ぬ先人とソレ

とてたう

ほと中に人内うちもととまふきみれを

新十八
さとがふのさくあかく

比

日トおと

まく記有ふをいくよハ免

○ソひうきかて候よ比

新古と新下と一毛ともなまく小日ハシロからなぬぬる神小林をうみて

のや向うをとす十五

後撰十五のあを西つをやの部小ハシロサカアラモの達あふにせせるをうふやの様ひとす考ふる小二の達室あるてにま

とまゆあゆくそじくへうもわくをつあらむとあくぬ

比

河す坂乃室

あるとす

あうとす

金七

あがきどウヒ

比

あきさのあぬをとむ

流のうきててもすハもの

常になふこと十九

年餘へとむくをふのふうのうれうあそ

比

ふうくまのま

やのうくまのま

とくに候くある

角を

赤魚を

の

後撰十九のひくふ

とくにひくふ

角を

赤魚を

の

後撰十九のひくふ

とくにひくふ

角を

赤魚を

の

○モノをとむる格

古

男あくべたをふうせんうのを色を

比

音を

の

新十

あまがなう川の山べのうべ

比

音を

の

新十二

あせあく東のあくへ

比

音を

の

新十六

又テ比又テ

又テ

音を

の

後修六

うのうちもあくわくと聲あき時あくよ

比

志ぐせあくよ

の

とせはとせあくわくあく一音へりみです

口つをあせら

口古

白鳥比色

はせ比

音を

の

ふくに一つとふうりうとあがく

又二つと二つをあせら

の

左
十三

君が名セ うづ名セ たすト新波あるみ川とセ りよあ河ひきとセ いは

左
十五

えきやのゆくセ うづセ あきつあちセ えぬセ お坂のせを

うつをあゆるハ

左
十七

秋セ 秋セ あづ月セ 月セ まづうそを思セ まづ

うづ

左
十九

をとセ そセ あすセ ととセ 略日セ リムセ あすの思

○んのさのせ

左
二十

人をねえせセ きうせセ 山が急きく夕かぎれひくしのあす

左
二十一

すと阿セ 桜の下根小あく虫のアミをバシルスセ そくせセ そくせセ

はあゝ右のわなあやうにうてよめらへ、モセトセ セんきせんと、りくまく

めうにうるゑあを小者あをセ まづうをねをみだりに吹くへそせをきうせを

山おうセ の風是セ 上のをああ成教セ あびセ せりきせすせんと、おまうセ え

温セ て、だせやさくせもあら山おうセ の風と、よもよもすれと、ひがとく

後セ もはとに誤りすあぐるああり

んをせといふ例、あふる葉うおや、七の老を風の教セ せせを、

まか葉あ万葉セ うべセ そとす小郁子年セ とまセ てせを店セ と

又轉輪セ 日記セ と、よどみ不さんと何うり多セ 、かくも通セ 例、

○瘦セ く病セ 月セ 下セ 月セ 月セ の、アノムセ 月セ やくめと、もあはま、武太中臣定和

左
二十二

あへたり、まゐをくしてり、厚れいや違セ まへる亦セ かあセ 。

左
二十三

わがせこうりうもあでゆくらよハ、瘦セ く病セ と、

の不ともと、尋セ うばひ、病セ ひほひも

左
二十四

わがせこうりうもあでゆくらよハ、瘦セ く病セ と、

いきやうの何セ
の不ともと、尋セ うばひ、病セ ひほひも

うば

うば

口二

郭公なくやき月にみづの歌をひくとぬきがあらしかり

子干

神代をほぢぬ浦うゑみへて至るへん年の歌もあら歌

後二
万十

夷くせばおがくせおひき夕月歌おぎりあら花陰うりて

山万

はるへとをうのキにあくとくもとほもとほもとほもとほもと

やさす葉の訓をあらせ

右の外うーをきくとあと、うねをそとある様あふし、う

葉ふハ跡ふくまく阿室、七の左を左風の聲ふ生せり、さて右の歌

の左ハ將く添ふるうち少いまく歎息のきをこゑうり、十一の切

さへ

たれなれとくとくあわせうべにあざせ

左也

はきぐひのじ葉葉ふハ狩多一古風の歌うめせり十一の切うり

左也

三の左も
新歌せり
おの切うり十九
三の歌も

左也

ぞもりぞあきぞ
おの歌せり
おの切うり二十
三の歌も

左也

うをもこのを
ぞの歌ふ生せり
おの切うり二十
三の歌も

左也

このをやの新
うせり
おの歌も

左也

かくやせあぐるをゆふなどあき人乃うゞぎく

新歌
十

角屋松
なきつと久米れいと橋
よき

左也

うせはりやしき向うて左くあふれ文昇せ見えとくとあ

心あくへ
阿イミをあくとあどやうにそとそとハ別へ

あとのもの

れをなき良きみよみの新歌うめを色あはすもあれり極致大政大臣

ぞ

<

○ぞの音ひち、紐籠の中より北條の辞で、この卷に出せらる三精徳の如

一様もまぶらりありのゆのひとうと西約
ニ立モトトマムレハシテカタヒ神ハうけ
きしめうかうらり
後梓ハシテイミタハアムリムノ御の
山のたまつせあうむすみ

中にぞハ家と族々うおやくへんとすゐるれのあいおのつうわふくば
候あどん辞あるかす、おのづくんとすゐらあかくして、おとほくちくあ
しきおのづくりうへれて、おまほの中にぞや候。そハ時々移りと
おまほのえりうへりうへて、おまほの中にぞや候。そハ時々移りと
正へきれをとのひぐれにすのあを

○ぞの移り辭をおさあぐへ松下へはきくらあ

後土　何りえてはなぐまもやとぞ　呂印尓あうしてそ立一かきりれ
塙川　石音　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく
後松　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく　おあぐく
左のあましとひらんといふハ、ぞの移りあきどん、皆下へはき
まくらかね、づせもちよつて代、此處の移りをひきへさん、後革のあ
きめばオカモミキモトおきい年をやまとき、安あは跡ふすよが
ぎとのひくと、おと小れはをとぞ不等一誤きらぬあうべ。

○ぞの移り辭を終へて下へつきくらあ

玉葉ニ　さうと　ぞ　おまえつせどはくをもうてハ似くらをあうりりを
小式輕　口ナハ　おまえつせどはくをもうてハ似くらをあうりりを
経済　口ナハ　おまえつせどはくをもうてハ似くらをあうりりを
すあ　おまえつせどはくをもうてハ似くらをあうりりを
左ノグキもあと移りてを下へはきくと、此
移りもあと移りてを下へはきくと、此
格をまとうべからず、ある事ある事、ほかまちそのうじ、
三の句まよかへと移せしをうき、
○ぞと移りてうふと移りてうふと移りてうふと
蓋森　おまえつせどはくをもうてハ似くらをあうりりを
はせハ曾の字を書くれを写一漫りとモソヒゲー　古今集ハウアリ
後本山　おまえつせどはくをもうてハ似くらをあうりりを

さきのとて格ある所とと見て下へ便をもる。

○そひきみて候ふぞ

十又 さあへばまぐれのまへつりとそひとくふぞ ちく參拝を
口セ なれたりつたすとハヤシヘどもぞうりぞ ちく参内を
十六 ううふをあらわすやうの秋あれぞ今ハチ度ふぞ そくの上の寄
付えたり

十五 ひめきばうろきのぞ つく一梯 さて進へと用をもくねば
口セ 有てやも音せまくべきはのまれいぞ いくとの社とソレ一參
十六 えうゆていぞ かしがれ山 さぬうとむの名ふとそきに
口セ ほきくとをむくとぞ おふ草 素未経験少袖めつて
口セ すきばやむすりをさとのこへえぞ やまうの井手の索み

十三 まめやキトとよのひきあれぞえをときへとひぞとソレ一きを伝
きせるへそひきあきがくともちーがく代
古ナニ あひくとおれふことひぞ あす坂のゆづきもハなりあせん
とをハシムとひけくも相吸ひて切きだのとつき、又ゆづきもみをしかまだ
程もとづきて下の邊のそめくまゝ餘の格と異くやの船のひりきの後
びう此格何ぞ、考へあえべし。

○ぞ二つあるも

十九 少へゆく石ぞ ちくある一はきて、一數ハたゞてぞ くへる空くある
松一 あをいもをあがめてぞ うる山がむの花うんぞ ううひめん
金九 うじ名ふぞ 人のつゝきへあくせりぞ うき一数ハタとぞ はくと
玉葉五松ぞ うる山とすとひきをもて前をあらうぞ あらんれを左の
木と門一格あれどもとくやうて二つのぞすといとく

松七 あもせすにあをくえあるわのきど立てきとぞ とれぞ とれ

さあへ上のぞハあきとひよかてみびとく下のぞハ切るぞあらと
ととまでほどきてるある

城川
百首
秋風すすむびく尾をと夕まぐきたぶ袖を
と
を夜もまわる
えきは上のぞい間うちぞうそゆきをととまくほき下にぞひ
ゆてもれづ

○切々ぞ|
諸のどちをあくそく

右
土
いとされを人あとが多そ大歎き比やくのとくと物もよらうぞ
口三
よもよもゆくへ止まつてもよ形ハタキ河をもぐりよとよもぐり
ぞ
後九
陵スルとすとあと城ゆいしみ山の井へりくともうにかわくぬ
ぞ
詔十
花ぢにまきうばうふとゆうもんうづきはせべもつひのあみち
ぞ
後十
君がたをいとよらうの御りきどよとよの御あくと
と
と哉とあくとよとよの御業小也
ときれそあく

古口　奈落をさへむを仰ぞ　女郎花あれあらかと人ふかる
口三　あたにいざといをぬだぞ　みあせ川あに通ひて意いとあ
松志　くるまくらわあまはありぞ　うのの多にあまをうめき
ナ三　かきくとよを口ぞ　ゆくものこもばかりある歎さんとハ
新二　う人のふきとくがべく阿アまよアとアりア
又アとやくとヒアとまでゑへほきアも
そとまくねたとアとアとア

古
二

を

ともあくまく鳴る

秋の歌を巻のとあつて何とせりへどおとぞともかく歌ゆ物を

かきのぞはうしれきどもかてととみて下へておきまらて上すワトス

ながむせば内くみぬあされごくはせせかどにせりぞりをか
いふせんあらうが是生れおくの升うれさうとそよのやぞ

すみぢを代わのが際とうりぞ

うれき小おりうなまくまえ

たましみかあひおぞ

とゆかみひとめりしめれしとめ

うせくかよその下へりを床くらへまぐて

切きまの下へおく舞へおくとのをかーの静か

○施ひて間くくらぞ

まき必上る何等の舞をちえぞとゆく

松ニテ
さにシルはめとふく風

のね

後

春をすいふぞ
梅やあらかんとがう川枝垂りうをかく

松

うりとせありとびらきてど称やハセラ葉

ぞ
うるくわゆれがくわ

えきのあらふあらふあらふ下に代のをへだておいてとみにつけてぞ
又もと中に余すとくも

後

をみふぞ
葉をうごとにききくうたをききうのをかく

口

阿をねまくたれをもあくや城あどうれーとくふよもくぞ

口

みをれや乃をす一はれをあぐく森ア人をあくといくよ

口

あらうのれをめのれをめのれをめのれをめのれを称めたが子

舟

いうがくようとさんみふがハリをめくふく星のあ

舟

原氏
み素のり
いづみゆりむくはくをく笑ましきはをふかはゆの

まきまきとあく厚ぐのぞ
正がやどの尾をう木を立グりゆく

ぞ
と
よ

拾
ナニ
リモテリキヤハの
カクシキの久米浜の橋の中央塔
モ
モウレヒトミアラシヤ教モタム

六

○ ぞえ
さきの上の間へもぞゑをほぐれとふへとく
六佐
あらそへ乃ちあらせりまじめに見ゆるはつりせたうとめ
ぞえ
原氏
わざわざよほのやうによひことせいかある人す
川
かくらす
ぞえ
なきふたり思ひみだるそ
ぞえ
あらぬぞん乃つまきあがりる
ぞえ

○ そぞれ
そぞれに問づくぞ爾せを原とす
一 そぞれをうそ者、そぞれをあざふゆせもるが袖からまつてあらの物
口 ぬあらぬうそそれへき秋の聲ふ もがぬきつた一夏をりえ
佐藤
そぞれつあらそぞれを山里す 月 うそぞれあら秋の月
○ そぞれ
そぞれを

堀川
る肩
かくす火をうちかへたて山づりのむのせ
組弓もせぶあふ

卷之三

○そや
いはくのうそいやもゆくやハ能ひ不すが歎息のやく
あはれ

新あさ
小竹尾
いわく
ぞや
多尔之
ハシタニ
ルトキ
アサキ
ホリキ

はあぐいりふをやあふぎやあとく文う多トソづきすやハえグひ乃
や小竹丸すと小河べ歎息のやあト

あきを、
そぞろのじゆくを、
あきやへのを何の教りせきを
あそやへのを教ひのやの教ふやうへのいにあ

○二のモ
シキハ清くぬれり但當・レニテ清き事也

あとはやあ北り僕のいそみいくそ
の人の手とえづ
まわるいづの金糸ハ

日記

好思
集 えせたるふちをれぬまうとゆきをいくそ
りありもみのよひあ

7
2
1
0
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0

考
古
文
化
乃
内
ハ
あ
ハ
そ
の
ゆ
う
ま
せ
と
是
ひ
あ
れ
セ
モ
も
の
を
あ
る
。
そ
の
ゆ
う
ま
せ
と
是
ひ
あ
れ
セ
モ
も
の
を
あ
る
。

よき。又あのふりをとらめらをもつてせば、十にうへて添とも辞れと
おわきあふ。うふせり。おゆばいくそとびあとよそもけど
くも。十小ハあづま。アシギ。又皆十のまあづま。おお今のもふその

とある。例を引げとやへんきめがくあん

すその物の口へ五のをその
部のをその例と考へ今をす 一つあぐまとうふへ、ほび常のモノド、ほんと改め例をす、
あぐまふへもこむじも、あらとがうにむまびとす

後ナム 始をぬとくとひもあくド、原名もそへく、あやふうみ ちどり ちどり ちどり

金一 基をりぬきをたづのん山がくうすれうへーの河 す す す す

河三 秋山乃原の山をくうすれうへーの河 す す す す

新一 玉のをよあえあばくえのなぐくへ、思がまゆうきく す す す す

後ニテ 天の川あがきてうひをうく す す す す

又はトミタハグリ河やがむき、形をこられ小者

正法三斗 策の戸れあと見るバクアモトキよわせれ故人乃加多木 す す す す

万十 香和子 うううとあがく信太江をゆるよつとす す す す す

新ナム うううとあがく信太江をゆるよつとす す す す す

捨松

十

さくぞ

一

いとを絶きのすこしちある

捨古三
俊教經臣

けくとおちのうばとりひくと花をも

さくぞ

まも庭あき

舍古天の子をもててはるに白きばうと人

さくぞ

かへりかくら

はあひとハ却てのまとふくすだすや

○さくぞの桜と考へた事

捨松

十

四日や風にそれなふものうづきびてせすのうだまは

さくぞ

あうれき

新柳八
俊教經臣

神あび乃森れあくまうに筋をかきくきりわくとさくぞ

あうるく

捨復三
左吉

とせすれを阿とたまをぬへきかる山か一だのまは

さくぞ

つるる

捨古五
かく風を

さくぞ

えなかく

一

うづくあくかち耶のまの秋の夕ぐを

さくぞ

麻も葉もとく

口

秋すまゆ向やのあくまの秋風うを

さくぞ

捨古十
玉葉ナルト

よやま西子のまにまかきかくぶく月を今ハキテシト、まく

一

玉葉

上りやとこゝとのぐすまく

又下にあを原とるむむかし

○さくぞ

十

あきよみあさくぞ

一

秋葉

あきよみあさくぞ

一

秋葉

あきよみあさくぞ

一

秋葉

あきよみあさくぞ

一

捨古十一
公實公

かを君さ川よもかばりひてあーたのめてぬハ

一

○一つのさくぞ

かを君さ川よもかばりひてあーたのめてぬハ

一

秋葉

かを君さ川よもかばりひてあーたのめてぬハ

一

りふとゆきこがうへのまくわくとまゆがいふもあり

の定まらる格子もびきて筋ふと山あひるゆく、左にあぐらがつとし。
 二 山吹をあやあや山吹花さんとうゑまん人の うとうひよみる
 日 ひよみのやまくすあをあせんとてし、うらの あぐらぬるく
 日 あのみやう残うぐひと雪うびん人のうらの 花とくらふ
 日 ちハやぬううちとくらなをとぞあひとハ日と年のへぬをと
 三 木のぬくとくらなをとぞあひと人との 日にとくら
 木 かくねだくとくらなをとぞあひと人との えくら
 又 えくら

山吹
 けせ

かくねだくとくら

○ののあがた、祖陵の实行比院の辞を、ぞや何あどり甲子年上
 小生せる三輪院あひる、但一ぞや何ふくみあきはのをや煙をかす。

の

五 あう袖うおとすうろも さを あおくかあられのうひあきと
 さを ちきく鳥をあらうがれうの山うつのうすとそく、袖を
 桜川 さくらくわ秋のうきれをあと さを そとうすとあくいは
 ○やぞ 四のをやの部うせきと さを あふきうせきと
 なえそ あふきうせきと 五のをあとの部ふせり さを
 なえそ あふきうせきと 七の さを あふきうせり

桜川
 さくら

さを

さを

さを

さを

さを

さを

金 ちりかはまき死をまよひて夜不ハ神のぬきぬありと
れぬへうりとせども程下へほきそりととゆき
又

日 三 朝 今うハナうやうまで日新のゆくへもあらんまきを
むちぶすに新みどりをゆく山の井はあぐも月のやくふをふりも
うきうせ定まねむ核のとくりもとびてはゆにうきかく核を
みづきとひと残り

午 五 五づきにあまざれうあまちーとあぐくす小笠のなくある
えきあるとせりてわらわらおとえをすも年一紀ニヌ一をす
原をふくあるとまこれをおとせ

件のあさりとせを定まれば核ふはあきとくぞや何あどふか
不例あしのうりまく黒あらふへぬをどん左のばとくりををる
どく核ぶと、いとおきある例少く、まあれいとひふれむ物へ

ゆめくらむと白ひてみどりにとまをとく

〇のの絆び少てなうば少て切くもあ これをいとおき取るゆく
セ ちもやう神のまうまく ほくかくと斗の坂をあえぬづく
九九のりくらむとののあらひとみどきホリ此川の流す
拾玉 まんのりくらむとの海士のつうち小船すくゆる
六度 くをあぬア夜の袖のあうにひと ましれ正うれのまちれく
〇のホドおやくとあきと 三つをつむらればせき

古ニ 今モツモ喫氣あらわらあらがの小峰の峰の山ざきの花
セ お傍を一見どもまのまうのまうの日の日の名づけ奉りま

さくらはつうさあく

さくら

三

いれぞの 法の 時の みやの 浦の ゆくふそつ物思ひを
はきあつまあらすに浦ののを仕みかとすとさくて上りのと異に
うるを

舟

をとせ 北 す 北 桃葉 北 宮北 こへおとめの内 の まよと

うをはうと二つとうつこ
え

四

風かす森堂の 神の 花の クルカミモトの 杏の 枝の 夢

しきをニツづ、二つ神ののハガのままで餘のうと是あり

△此手の所

○のとあきらあおのうるももおもと思ひゆる也 摂葉が集にすむふらんあれやあ
吹あふ神風をまことに秋をきのうづく。ゆくか 人の タツマツの
野ぐひせ。物のあきらあきらにつきぬ。北 浪のまことの
あきらきもいとく。浪くじてあきらか
の やももよがれあれはくの
の

原氏

量

○用の語たりともの

大

室

常花 常室 どうどふそくをも育ふ 雪散の カ チュウモモヒタリの

大

室

夕きをばたけひそあきそま川人のえやうドやの まごめあれハ
わかれドの りまうでハくとひのをまくもかびくとくとくとく

大

室

うみヨビキドキの エあれす思ひあせあくタモモヒソム
有能。乃々をかくとをひりをくらべなし の 岩井庵ふも

そ人をなきが數うとあせせふ阿ノキーハの 秋の クスモ
蘆葦

万

十二

丹波の方に北の山のあひがづくをえんの いこひが呂そあく下
又玉葉十

ス玉葉十 とくへし今ハうしやの段方もまされをハ多々外のよすか
口ナニあバサのとのまろそぞうとまのミヌキと食ふをぞうと

ス玉葉十

口ナニあバサのとのまろそぞうとまのミヌキと食ふをぞうと

口十三のうきふなひあすうのまくはねまへうきすのもぞあすう
風邪ニヨリマカヒ花よしのあがめりつまにくまくまのく
口ナニアダクよくゆきちぎるを多く中に入ふをさだのあくまうバ
れくハあひて云をあくにもせら物をアドキ様あぐもいり
くすくさりだ

○さと旅ぶの

古 秋をさと旅たゞみやせりあく麻のめタハとすとまのさやきと
口 八月のまきのあきとまき行びのとゆひつまくの中のうさ
後に あそをうり旅のとゆひとが意を人見かくるととのヨリびと
口 タクレを旅すゆく船を北山とてあざれあらまのけじさ
は格あがいとあやいはあうのとを北一程てきとちうすのあらふすて後
せの人とせとをもあらとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ
古今 序 晴花不思ひくめ 北 あぢさあさ オにしうつきのりふもあはれと
おとづりてゆと旅びと

路在定ふを 君をいのちりのたふとを かくアモ旅するをとたのととむと

三 まじめあみそむこせぢあるのとせ川考乃 まやりと あまごり旅と
かくのとくあくをふせりへりちせど是ハ」ととくれあるとく

又

金 木舟重ハ木舟葉白く海下りをこや 少年山のそ のまびと
母思 集

みをせぬもくすきう多れぞのとつせぬあやまろがのうさ
えきう上にやとかくとくの根とハ黒アシモノのとれどりくまうか
えりう名のまびとせうらがこのうさとと一匁を二の身の体のとくにあ
もあわせとくせやとソリて立つて立つて立つて立つて立つて立つて立つて
○後檢走ナハ引だくりあぐみ構を序トリをふかほのゆもくまつと
めぬみ舟とハあくに草の根の上のミドリくわくとくらざれのとくに
きくは三つあぐみのうのさへとくらざれのとくに

○かとくとと旅ぶ例をは次かの教う本せを 彼をと足を考ふ

みのうへふううべら私の君あくをうそとあうといふ外すと
 ロルをぐろまじりの小侍の人あくを部のつまふといもうくと
 ロル思おもふとあつらあどの玉あくをほめをうけてるせうし物を
 ロルうなや只よさうの色あくをうせてもとせうしあと
 ロル金かね八や人ひとの太おてうきき月つきあくをめめたすとル氣きをそくす
 ロル左さ三さん人ひとのとこにみちぬきばみとつくくととむむあくま
 ロル後ご五ご歩ある三さんのや万まんはし小これどと急いそむむのうとくくぬ
 ロル十六じゅうろくありひ歩ある三さんの葉はをたきええのふふにあくがままう
 ロル十九じゅうくわうきゆくゆくのくせあくをゆきゆきとあくいもともとルるあれ
 ロル右う七しち義代ぎだいのうそそのあくめめきのうそそう
 ロル前ま八や人ひとのうそそのうそそうそそうそそうそそう
 ロル九く十じゅう人ひとのうそそのうそそうそそうそそう
 ロル一いち一いっ人ひとのうそそのうそそうそそう
 ロル万まんニに人ひとのうそそのうそそうそそう
 郷ごうふあゑあゑくく小侍の秋あき風かぜうゑゑぬきぬきやあうのとす
 おのああどどそりううききのすすをかか小こくへへええばばほほううき
 うゆるうゆるここ古こ今きんある二に首しゅのすすをかかうう中なかににつけつけのをを下下

○のめくとしよまわの

左十一

ナ一時川の流あくゆくみの まへ楚人を口ひそめて
口 夕月秋さかやゑべの松の葉の うともこらぬ事もあるる那
このまぐいぢみのてく 松の葉のてくとまこと此夜古あふはいとむか

○言をへどもストヘツの

左十三

支 及比旅の やあうとあれバ 郡云鳴一と魚う 何くるあひの先
後土 あふ亭へゆきやえま ほのまの 今をりてふ 浦のまう鳴
屋松 宇治川の ちゑく 何ぞうなうり 何ぞううれをばくさん

○いきりあるの

舟 及ひゆきまうとハ遠のまづりぬやどりの月の 神のせをまに

左十五

支二 陵在ニ ひくとおはをあや跡のいとまきんとへゝ人の 花比さくを
後赤壁 及比旅のせを紀尔月のやどり花のまわいと人のまへとりまをニミ小
うちへしていもが不鮮りのす いきかひあひ又新在今え まく く西散
まを小林のあらまにとまうかのとおぎりゆく、らせてもあらべをほ、りをと
あらのよおざうゆくと金ふつまて上へるまみかふ在のニ首といひかきア

○一つれの

左十七

支一 大きなれゑあらへう まへあきてよのほのの とや天あすくし
こきへよつてのゑゑとよくまくはのをえかへつておねうをあらへれ
うの外へまくへぞく

好思

集 人あとさうのとゆう川口すふへあれ し神をあれまきゆく
をもひくあとさうをあたのあれのと日本をまきゆくだのまく
そあるへはまへ辛とすとをうくへまく

○一つれの

すあらをすのひ
すあらをすのひ
三七
すあらをすのひ
すあらをすのひ

舟

思が代うらをすはあらをゑの旅の

舟

思が代うらをすはあらをゑの旅の

舟

やう。日のはるのあをひの部はまのさかりの
内小サリ考小細註重音のくわくわくの
とくあくへとこれあるとこくふれりての
ひすト範のひすのやうきえゆくわくれハ
やううち内の、ひす範のひすのこく里
うされハアのきかるのまのかとす
すソリ小そやぬほら

をあざて十一の句ハツトをと

ニカムアシホトナリテ

モアシホトナリテ口十九
高木家集後五日のや五日の年日にはハ秋の川と云ひみを

登玉集五日春のや秋のまゝと云ひて秋あらへとしむち

是ハ秋といふ下へ人と云ひて秋あらへとしむち
て秋あらへと云ひて秋あらへとしむち

太のあた、とく一弓弓にすて、て尔をもとやうあらへ、おべく新な今
のえうた、かくもつゝく詞をつくりとまわるわい、のうはせ、はせ、はせ

おおがらきれ人のよきふべき格りあらへ

○物の

古

うせまよの人云れたら、そは云あれぬ。すの

かせぬをく

古

なくあうと云ふえぬ。すの

うすにだハ志のび小すゆう量あうりを

新十三

君こゑとしとおよふとぬきをたのまぬ。すの

うひつゞから

道師五十首あと主のや三月のうそのタリも)吉近人もしやとくの
行家集後五日のや五日の年日にはハ秋の川と云ひみを

登玉集五日春のや秋のまゝと云ひて秋あらへとしむち

○のや

古

うめのや後山をく。松十

いづのやりうかはほのく

古

ああけのや木賊スギ小おり向かひき。万二

二ふのやち角山のく

古

河内のやかくは山のく。室屋をもうせのやゆづきがりにく。

日半夜のうふをあらのやまかはくとくとくとく

又や名の下あらでせ

古

みまとのや草う中あらう。柳川右音

キのうかうのやもとく花とてあを成

スミ桂小こいのやうこは万葉のうと李せう深え玉葉十八叶のやうこ

ハラサキやとくのと深きア例あきむがとあり

○鶴ひの辞あら下におくの

古

春日被比古あつみやあらくのゆううして人のゆく

口古

あえぎゆくあらきの川のよどみあらうとや人のありとん

二

きとのこぬうどふある紙をくみをひくせよと月のあくらん

三

宿日とけあへとくつりのまふいあをそとびて秋月のふく

四

いのちどふうちろにうあとああばあふうあきのかあくま

えきは上ふや何あどうううひの辞をちまく下をその後びかとおも中間うおくのすへは格とおり

五

李たなば花とやそくらむくまれきくねふうぐひのあく

六

リムヨウれ日はりのとよへどを歌や歌すめく神のあき。

七

大あくそのすれどまとや朱タルきんかくにどふきと人のあき。

八

歌あび乃みむら比肩やくさくまの河の河のあごき。

九

秋風やなとどきよわせほめあくわとびきしより袖のかこうぬ。

十

秋篠やか山の里やゑぐまくいこほのだむくふをのかくきる。

○

かちのと日をうて旅びのけ格と月ト

が

濁

古

十九 まかうふみまく人まくらむそのさやぐま歌をひがひがゆ

一

わが色ど北梅のま枝やアモツツ人ゆひの外ト君がひくせよ

語ひ小あつやぬ

木のあさのねびきの比較
又むきびくほづくぬかむ

口十九 爰トモハホノセナリモカヨガシロのモヌホジホモ思ガミシニム
口二 口がせこはやまくとくあとさよアテテ候事候ナニ
口三 うなもれをがさとくはくくルナシホホトルゲありナサリ
口四 えりくらをのやくそといふもんがくともうつどひを
口五 秋の田地ノ仰アヒトヒタケレバヨヒリズルゲうれ一きもあし
口六 きとせといまくをくられをすあぐ日す
口七 ゆちうはく
口八 サルモカホモハクハビセ有リ
口九 ゆの中にあすすくバとあすす人ある
口十 ガホトキモキナリ我

○きと旗ぶか

左十三 うつばをさして候アメヌホミハ人をとすくとくう
右十四 う風をどくうちをせむにちアキアヅツにうう
左十五 な木を木にうぐれむ枝も有レのときとく麻をソ
右十六 うわく阿をバヨグてもうると里ちかくあととすつアヌ
ナ格もおま葉うおわ、あベキとある、身の後の下とくとくハチのと
クキのの義りはあおかくせせらるめ、用の諸の下をまとう左のとくちカ
ウキ、但一ノ葉に殊がかるもあどりて、船の傍乃下あれどカとまく
此多様次うい

〇つまはのとふ不毛も、お葉小ハカヒトシトおわし、左ナ葉もうこ
あハ、大う船の傍の下をまうハの、用の傍のひ枝もうハカヘ、但一ノ葉が
たが、あら妹が、あらの都も、船の傍乃下あれど、後もアカヒトシト、モ外
義が花梅う枝、後もアヤメ甲斐がねもアカヒトシト、モカトリヒアラ者也。

○ うかはまの
かべ

よのきうがふの
教本をせど

